

書評

『パラドックスの社会学』 森下伸也・君塚大学・宮本考二著、新曜社、1989、315頁、1900円。

鹿又 伸夫 (立命館大学)

本書では、「社会学の最大の魅力は、そのパラドクシカルな思考法、逆説的な発想にある」「きまりきった思考図式を突破してアッと驚くような真理をみつけだす。そうした自由で逆説的な発想法が社会学のいのちであり、社会学の面白さの源泉である」(まえがき)とされ、「常識破壊ゲームとしての社会学」の面白さを伝えるための入門書であることが宣言されている。こうした立場から、「パラドックス」「意図せざる結果」「潜在的機能」などの用語が多用され、強調されている。

評者は、本書を基礎演習という1年生の授業の夏期レポート課題図書の一つにした。大別すると、感想は「社会学的な発想の面白さがわかった」という好意的評価と、「よけいに社会学がわからなくなった」という批評とにわかれた。既成の入門書と講義で学んでいる学生にとって、社会現象のパラドックスとその解読法としての社会学を強調する本書は目新しく、興味をそそるものだったろう。社会学がわからなくなったという感想にしても、一面では画一的な領域わけ、一面では押しつけがましい解釈をもった社会学の教科書と講義内容を破壊する点で、筆者たちの意図は十分に成功しているのだろう。

しかし、筆者たちの意図にそぐわない、本書がもたらす意図せざる結果もあるように思える。本書では、パラドックスにみちた社会現象を全面におしだすために、パラドックスという用語が多用されている。その多用はかえって無用の混乱をもたらしかねない。

章および節の題目は総計18であるが、そのうち16題目でこの用語が使われている。「論理的パラドックス」「意味と機能の～」「意識の～」「人間存在の～」「人間関係の～」「集団の～」「逸脱の～」「家族と愛情の～」「科学と技術の～」「文化と教育の～」「経済の～」「権力の～」「運動の～」などである。さらに、項目名や本文では次のようなパラドックスも出てくる。「自己言及的～」「相対主義の～」「哲学的～」「社会学的～」「状態性～」「因果性～」「制度化の～」「役割の～」「役割葛藤の～」「近代化の～」「群衆の～」「集団所属と個性の～」「愛の～」「恋愛結婚の～」「医療の～」「臓器移植の～」「複製技術の～」「学校化の～」「革命の～」。

こうしたパラドックス用語の多用は、かえって筆者たちが注目する社会のパラドックス現象の理解をあいまいにし、そして限定的な側面にしぼる可能性がある。個人内レベルでのディレンマや役割葛藤と、マイクロ次元での合理性とマクロ次元での合理性が相反する社会的ディレン

理論と方法

マが同列に議論されている。また、意図せざる結果については、意図をもつ主体が誰なのか整理されないまま、意図に反して結果が悪い場合に限って説明している。さらに、全体をとおし、紹介されている多くの事例は潜在的逆機能を指摘する形式で書かれ、集団・文化・国家・資本主義等の否定的側面が強調されている。これでは、「パラドックス=意図に反する悪い結果=潜在的逆機能」という図式で理解され、個人レベルであっても社会レベルであっても、「うまくいかない事象を扱うのが社会学である」と誤解されかねない。

パラドックス現象の解明への手がかりが示されていないことは、混乱と誤解を増幅してしまうかもしれない。手がかりとは、研究戦略、アプローチ、枠組みといったものの整理である。たしかに、第1章「パラドックスの類型学」では、「意味と機能」「機能概念の分類」「因果連鎖」「予言の自己成就」「悪循環」「合成の誤謬」「創発特性」「発展の弁証法」など戦略的意味のある概念が述べられているが、羅列的で社会現象にどうあてはめていくか指針は示されない。アド・ホックにこれらの用語をもちいた事後解釈で、シニカルな社会批評をすればよいという印象をあたえるかもしれない。

筆者たちは社会学での方法論および論理性を強調する。「社会学とは、……気がつかれていない因果連鎖をあきらかにしていくための方法論にはかならない」「意外な事実、逆説的な事実を意識的に発見し、パラドックスを論理的に説明していく作業、それが社会学なのである」(p.19)といった記述にそうした立場が表明されている。

しかし、数理社会学の立場からいえば、本書では方法論と論理性が実質的にはともなっていない、と指摘しなければならない。方法論については、上述した戦略的概念の羅列に終わっている。現状では、意図せざる結果についての方法論を整理して示せというのが無理な注文であるにしても、意図せざる結果を生成するメカニズムとプロセスに対する視点が欠けている。たとえば、ブードン流の理論はまったく出てこないし、研究戦略のうえで重要と思えるゲーム論的ディレンマ研究は囚人のディレンマが人間関係のパラドックスの事例として紹介されているにすぎない。

また、パラドックスの論理的説明が社会学だというのが、事例の説明は厳密な論理性を保っているとはいえない。たとえば、「きわめつきの因果性パラドックス」だという「発展の弁証法」は「あるものが……十分に発展しきることによって、自己とはまったく逆の性質のものを論理必然的につくりだしてしまう現象」(p.75)とされているが、事例としてあげられている自由競争経済から独占経済への転化の説明を読んでも、どんな論理上の必然性があるのか疑問である。こうした疑問が出てくるのは、評者が論理的説明をたんなるストーリーのレベルではなく、前提や条件を加味した厳密なものと思定しているからである。そうした数学的な論理は必要ないといふにしても、筆者らが推奨する「風がふけば桶屋がもうかる」式の因果連鎖の説明が論理的説明といえるのか疑問をもつ。さらに、事例の説明で機能概念を多用しているのに、機能の事後評価で多義的解釈が可能であるという問題には触れられていないのは、片手落ちではなからうか。

入門書に対する要求以上の批評を加えてしまったが、それは本書が入門者に社会学的発想の面白さを伝えることに十分に成功しているからである。だからこそ、社会学をシニカルな社会批評ととらえるイメージが一人歩きすることに危惧を感じたのである。最後に形式的な注文をいえば、平易な文体で身近な事例を多く取り上げて工夫を凝らしていることは認めるが、これが300頁にもおよぶとかえって冗長に感じた。あまり幅広い分野にこだわらず、スリムな仕上がりの方が読みやすく、社会学的な発想法がストレートに読者に伝わるように思う。

『家父長制と資本制』 上野千鶴子著、岩波書店、1990、334頁、2500円。

坂本佳鶴恵（日本女子大学）

長らく待たれていた、上野千鶴子氏のフェミニズムの理論書が、ようやく刊行された。本書は、1986年から1988年にかけて、『思想の科学』に連載された論文を加筆・修正したものが、フェミニズム界きっての論客ともくされる氏が、初めて自身の理論を体系的にまとめた本として注目される。フェミニズムとは、20世紀に社会運動として現れてきた、男女平等を掲げる思想的立場といえる。フェミニズムの理論は、このような運動に正当性の根拠と運動の指針を与えるという要請に対処しているが、そればかりでなく、今では、従来の社会科学の理論が、男女不平等という一つの価値的前提からたてられている（フェミニズムが男女平等という価値前提から出発しているのと同様に）ことを指摘し、その理論的な偏向と限界を明らかにするという理論内部における使命をも帯びている。あらゆる理論が価値的な前提を抜きにしては語れないこと、そしていかなる前提に立つかによって、理論上問題化できる範囲（問題設定も説明変数も）が限定されることを念頭におけば、フェミニズムの理論は、女性解放というヒューマニスティックな、生きる現場での問題解決と同時に、人間一般に関する行動様式の説明体系の発展にも大きく寄与する可能性を持つものである。しかし、個別の、具体的な問題をめぐる論争が注目を集める反面、そうした論点を位置づけるような、フェミニズムの一般理論は、残念ながらまだ十分に展開されていない。本書は、こうしたフェミニズムの状況のなかで、まさに待望されていたといってよい。

それでは、本書は、どのようにフェミニズムの立場にたった理論（厳密にいうと、これには、男女の平等化を直接テーマとし、男女差別の原因を究明する理論を確立するという場合と、男女が本来平等であるという仮説構成にたって、人間の行動様式全般について従来の理論とは異なる理論をたてるという2つの場合がある。後者の場合でも、不平等が社会の構成原理となっている状態の記述となる。とりあえず、ここでは、前者の意味で用いている。）を定立しているののだろうか。ここでは、氏の理論が、従来のフェミニズムの理論のなかで、どのようなものとして位置づけられるのか、そして、氏が本書で主張しようとしたことは何なの